

一般質問通告書

令和8年2月24日

高島市議会議長 河越 安実治 様

高島市議会議員 2番 吉見 大

次の事項について質問いたしたいので通告します。

※質問項目（番号）が2以上ある場合は、次のどちらかに○をつけてください。

- ・質問番号1の用紙にだけご記入ください。
- ・質問が一つだけの場合は必然的に1となりますので、記入は不要です。

初問は { 1. 全項目一括質問一括答弁
2. 項目ごとに一括質問一括答弁

（質問番号 1） 発 言 事 項	人口減少下における文化資源を活用した地域ブランディングと 持続可能な財政運営について
要 旨	（項目だけでなく、質問の趣旨が理解できるように記入してください。）
	<p>人口減少と少子高齢化の進行により、本市の財政状況は今後さらに厳しくなっていくことが見込まれています。税収の大きな伸びは期待しにくい一方で、社会保障費や公共施設の維持管理費は確実に増加していきます。この現実を放っておいても改善するものではなく、何もしなければ将来世代に負担を残してしまう可能性もあります。</p> <p>このような状況の中で、自治体運営は「何を削減するか」という議論に傾きがちになります。しかし私は、行財政計画の見直しというこの局面は、単なる歳出削減の整理ではなく、「本市は何を未来に残すのか」「地域の価値として何を育てていくのか」を考える機会であると捉えています。</p> <p>令和8年度施政方針において市長は、市政運営にあたり「高島市の魅力と可能性を認識し、それらを大切にしながら活かしていくこと」、そして市民や民間事業者と行政が力を合わせて新しい価値を創り上げていく「官民共創のまちづくり」を重視する方針を示されました。これは、地域固有の資源を単なる施策や事</p>

業としてではなく、本市の未来を形づくる価値として捉え直していく姿勢であると受け止めています。本質問は、こうした施政方針の方向性を踏まえ、本市に既に存在している地域資源や文化資源をどのように将来戦略へ位置付けていくのかを問うものであります。

私はこれまでの一般質問において、財政の持続可能性や将来負担の見通しについて問い、限られた財源の中で、将来につながる施策をどのように位置付けるのかを問題提起してきました。また、施策が縦割りで終わるのではなく、将来像のもとで横につながっていく視点の重要性についても述べてきました。

その延長線上に、本市が何を価値として未来に託すのかという思いがあり、今回の質問へと至っています。これは単なる文化振興の議論ではなく、市政のあり方そのものに関わる問いであります。

私は昨年、北海道東川町、岡山県真庭市、鳥取県南部町を視察しました。北海道東川町は1985年に「写真の町」を宣言し、40年以上にわたり写真文化をまちづくりの中心に据え続けています。写真甲子園などの事業を単発のイベントで終わらせるのではなく、教育や移住政策、ブランド戦略と結び付け、「東川」という町の名前そのものに文化のイメージを定着させています。

また、岡山県真庭市では、図書館を単なる本の貸出施設ではなく、地域が学び、集い、語り合う拠点「知と自治の拠点」として位置付け、市民参加型の運営を通じて地域の活力を生み出しています。

さらに鳥取県南部町では、コミュニティスクールを中心に、地域全体で子どもを育てる仕組みを築き、教育とまちづくりを一体で進めていました。

これらの自治体に共通していたのは、文化や教育を単なる「支出」としてではなく、「人を育てる取組」としてまちの将来を支える柱に位置付けていた点であります。文化や教育はすぐに利益を生むものではないかもしれませんが。しかし文化は、そのまちらしい物語を形成し、時間をかけて地域ブランドを築き、都市の名前に意味を与えていきます。

例えばフランスのカンヌ国際映画祭は1946年から続いています。経済効果も重要ですが、それ以上に「カンヌ」という都市名が映画文化の象徴として世界に認知されていることに大きな意味があります。ブランドとは宣伝ではなく、時間を

かけて積み重ねられていくものであります。

こうした事例を通じて、文化は長い時間をかけて地域の価値を高めていく力を持っていると私は確信しました。そして改めて本市を見つめたとき、すでにその力は本市にもあるのではないかと感じています。本市においても、市民の主体的な参加のもと、長年にわたり継続されてきた文化的な取組が存在しています。その代表的な事例の一つに高島市市民劇があります。

高島市市民劇は、市誕生以来おおむね3年に一度の周期で実施され、約20年にわたり続いてきました。延べ数千人規模の市民が関わり、小中学生、高校生、合唱団体、吹奏楽団体、地域ボランティア、舞台美術や音響照明の技術スタッフ、市民キャストなど、多世代・多分野の市民が主体的に参加してきました。

ここで重要なのは参加人数そのものではありません。20年という長年継続されてきた市民参加型文化事業としての積み重ねの重みであります。続けてきたからこそ、人と人とのつながりが生まれ、参加した子どもが成長し、今度は支える側へと回る。観客だった市民が舞台に立つ。そうした世代を超えた循環が育まれています。

さらに市民劇には、

- ・地域の歴史を掘り起こし、舞台という形で共有してきたこと
(歴史資源の可視化)
- ・世代を超えて協力する中で築かれてきた信頼関係
(世代横断的な共同作業による社会関係資本の形成)
- ・参加することで育まれる自信や誇り
(表現活動を通じた自己効力感の醸成)
- ・地域に積み重ねられてきた舞台運営の経験やノウハウ
(舞台、文化芸術活動を支える技能の継承)
- ・市民と行政が共に創り上げてきた経験
(市民と行政の協働モデルの実践)

という多面的な価値が生まれています。これらは単なる事業成果ではなく、20年という時間の中で蓄積され醸成してきた『高島市の重要な資源であり財産』でもあります。そしてこの積み重ねは、意味付けをし直し、将来の方向性の中に位置付けていくなれば、本市にとって未来へ引き継ぐべき資産へと高めていくことができるものと考えています。

ゼロから新しいブランドを創り上げるには時間も財政的な投資も必要です。しかし市民劇はすでに体制や人材、経験が整っている取組であります。新たに大規模な財政支出を前提とせずとも、これまで積み重ねられてきた人的資源や経験を活かすことで発展させていくことが可能である点は、大きな特徴であり利点であると考えます。財政が厳しい今だからこそ、今ある価値を活かすという発想は、有効であり将来を見据えた選択の一つとなり得るものと考えます。

人口が減る時代においては、「つながった人々」そのものが地域の力になります。市民劇は20年という時間の中で、人のつながりと経験、そしてまちへの誇りを育んできました。それは本市の歩みの中で形成されてきた重要な基盤であり、未来へとつながる大きな可能性を秘めているものだとも考えています。

行財政計画の見直しは、単なる数字の調整ではありません。本市が何を価値として未来に残すのかを選び取る作業であります。

ただ小さくなる方向へ進むのか。それとも、今ある大切な財産を未来への大切な財産へと育てていくのか。本市はどのような道を選び、これから歩いていくのか。

そして、こうした選択を通じて、施政方針において示された「高島市の魅力と可能性を活かした市政運営」をどのように具体化していくのかという観点を踏まえ以下の点について質問をさせていただきます。

【質問事項】

- 1 高島市市民劇について、約20年にわたる継続実績、世代循環、人材育成効果、地域への帰属意識の醸成という観点からどのように評価しているか。また、これを文化振興の中でどのように位置付け、将来的な地域価値向上へと結び付けていく可能性があると考えているのか。
- 2 本市は、人口減少下における自治体経営において、こうした市民劇のような文化資源を含む地域固有資源を地域ブランディングの核となり得る戦略的資産と認識しているのか。
- 3 本市は人口減少下において「課題解決型」ではなく「価値創造型」のまちづくりをどのように構想しているのか。新たな発想による未来投資について、市としての基本的なビジョンをどう考えているのか。
- 4 現在示されている長期財政計画見直し資料を踏まえ、基金残高推移や歳出構造の見直しを含め、将来的な地域価値向上や税収基盤強化につながる施策を、現在策定中の第3次総合計画にどのように反映させていく考えなのか。